

雀の話

松井淑子

猛暑つづきのこの前の夏の話である。どこからか雀が一羽やってきて、うちのベランダの手摺りに止まった。大通りに面して立ち並ぶビル、マンション群の一軒であるうちのあたりでは、野鳥といえは鴉からすぐらいで、雀を見掛けることもめつたにない。

うれしくなって眺めていると、雀はハアハアした感じで口を開き、頭の羽毛を逆立てて、しきりにベランダの床をのぞきこんでいる。目当ては、どうやらエアコンの室外機のホースから流れ出し、ベランダの端の溝にたまって小川状をなす水らしい。体の小さな雀にとっては、飲むにせよ浴びるにせよ、この小川で充分なだろう。なるほど、うまいところに目をつけたものだ、と感心した。

ところがその日はまだ朝のうちで、といっても私の朝だから十時をとくに回っていたのだが、まだエアコンをつけておらず、小川もできていなかった。そこで、雀が飲んでも浴びてもいいようにと、植木鉢の受け皿に水を満たし、ベランダに出してやることにした。

水浴びといえは、雀の砂浴びを見たことがある。あれは何年前のことだったか、季節も忘れてしまったが、日比谷公園を散歩していたときのことである。樹々の間の地面に三つばかりお椀ぐらいの大きさの穴があちこちにあいており、その一つで雀が砂浴びをしているのである。足を止めると、雀は頭を低め、翼を広げて、砂を巻き上げるように体を震わせる。水ではなくて砂など浴びては体がかえって汚れるのではないかと思われるのだが、そのへんはどうなっているのかよくわからない。

穴のそばでは、評判のラーメン屋の前か何かのように四、五羽の雀が順番待ちをして一列に並んでいる。ほかにも穴があるのに、なぜそちらにいかずにこの穴だけに並んでいるのか、これも不思議だった。

そのうち一羽が列から離れ、穴のふちにいつて、砂浴びしている雀の頭をくちほし嘴でコツンと突つづいた。

「こら、長すぎるぞ。いい加減にしろ」

と言っている感じである。すると砂浴びしていた雀はあわてて穴から飛び出し、今度は順番待ちをしていた先頭の雀が穴に入って砂浴びをはじめた。雀の社会にも、それなりの秩序があるようだ。

ある。考えてみると、この世界には、雀に限らずそれなりの秩序と文化をもった多くの生き物たちの社会が重なり合っているのかもしれない。

ベランダの雀は、水の器を置いてやろうと私がガラス戸を開けると、当然のことながら飛び立ってしまった。

### 「清紫会」だより

◆第170回 平成三十年八月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階C会議室

〈提出作品〉林博子・落とし物／松井淑子・雀の話

◆第171回 九月二十日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二

〈提出作品〉林博子・「蟬」の字

◆第172回 十月十八日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二

〈提出作品〉林博子・台風その前後／松井淑子・テレビ番組